

2022年8月14日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「教会と隣人」

聖書：ローマの信徒への手紙15:1～6

パウロの神学には、律法の「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛せよ」、「隣人を愛せよ」がある。ローマの教会へそのことの重要性を説いている。「心を合わせ」て礼拝を捧げ、「声をそろえて」主を賛美する。そして「わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方を、たたえさせてくださいますように」(ロマ15:6)。1～3節には「隣人愛」とは何かを記す。私たちはつい自分が中心で自分を満足させようと働く。それでは聖書が教える「隣人愛」からは遠ざかってしまう。「キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした」とあり、「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」。この引用(詩編69:10)の意味は、イエスは神の子でありながら、神の力を自分のためには使わず、隣人のために注いで行く。しかし人々からはののしられ、十字架へと向かわれた。神へのそしりがイエスに降りかかったということになる。聖書が教える「隣人愛」とは何かを深めて行きたい。ロマ書は、何も教会の中のことにのみ限定しているのではなく、地域とのかかわりの中でも「隣人」とは何かを記している。

インド独立の父として知られているマハトマ・ガンディーが「隣人の原理」について語っている。ガンディーは、鉄道の存在を批判した。彼の著書『真の独立への道』の中で、「鉄道で邪悪が広がります」と言っている。近代のスピード化を懐疑的に見ていた。何事においてもスピード化して行くことが正しいと見る社会に対して誤りであると見た。人々はゆっくり歩くことを忘れ、早く、遠くへ行くことに価値を見出した。その結果、農家は高く売れるところに穀物を売るようになり、物があり余る場所と、物が無くて餓死する場所が出てくると。そしてこうも言う。人の移動とともに「感染症」があつという間に拡大するようになったと。「良いものはカタツムリのように進むのです」と。現代社会をよく言い当てている。

「隣人の原理」は、近くにいる人との支え合いを重視し、地産地消を推進した。地域のもものは地域で消費する。都市住民には、近隣の村落から農作物を買う義務がある。生産者にも、消費者にも大切な役割がある。隣人の支援を優先しなければ、世界はバランスを失うことになる。ガンディーの言葉は、現在の世界を鋭く言い当てている。ガンディーの「隣人の原理」はキリストの教えから得たものであろう。

パウロの「隣人愛」もまた、当然ながら主イエスから学んだもの。イエスのこのような教えを基礎として、教会は、教会として成り立つ。私たちの教会は、隣人に向き合っているだろうか？私たちの教会にできる、またふさわしい、隣人との向き合い方を見出して行きたい。(神谷)